40　忍ぶれど　色に出でにけり　わが恋は　物や思ふと　人の問ふまで

平　兼盛



ハートのリング

〈声に出してよんでみよう〉

シノブレド　イロニイデニケリ

ワガコイワ　モノヤオモート　ヒトノトーマデ

＊ 第２句の「色に出でにけり」の、音の数を数えてみましょう。「イ・ロ・ニ・イ・デ・ニ・ケ・リ」。８音ですね。これは、「５・７・５・７・７」の定型からはみ出してしまっています。このような場合を、「**字余り**」と言います。反対に、足りない場合は「**字足らず**」と言います。しかし、どちらの場合も音読する時はあくまでも「５・７・５・７・７」のリズムに乗せて読みます。このため、字余りの歌には切迫感が、字足らずの歌には空白感が、生まれるという効果があります。

＊語頭以外の**ハ行**の文字、つまり語中・語尾の「は・ひ・ふ・へ・ほ」は、**ワ行音**「ワ・イ・ウ・エ・オ」でよみます。[1]　これを、「**ハ行転呼音**」と言います。

＊「**オ段の音＋う／ふ**」は、「**オー**」とよみます。現代語でも、「おう（王）」を「オー」、「さとう（砂糖・佐藤）」を「サトー」とよみますね。これは、歴史的かなづかいの跡が現代かなづかいにも残されている例の１つです。

〈どんな意味だろう〉

押し隠そうと、耐え忍んでいても、様子に出てしまったのだなあ。

私のこの恋心は。

物思いをしているのか、と人が尋ねるほどまでに。

＊第２句「出でにけり」の最後の「けり」は、詠嘆を表す助動詞の終止形です。したがって、この歌は第２句が文末で、ここで切れることになります。このような歌の構造を「**２句切れ**」と言います。第３・４・５句は、**倒置**されています。倒置とは、通常とは逆の語順で表現することで、最も強調したい部分を先に述べる技法です。

〈解説〉

忍ぶ恋の切なさ・やるせなさを詠った秀歌として、古来、人気を集めています。

天徳四（960）年の**歌合**で、壬生忠見の「40 恋すてふ」の歌と合わされたのですが、どちらの歌も優劣つけ難く、判者の藤原実頼も困りはててしまい、そっと村上天皇の様子をうかがったところ、天皇は低い声で兼盛のこの「忍ぶれど」の歌を口ずさまれていたため、兼盛の歌に軍配が上がった、という言い伝えがあります。この判定にショックを受けた忠見が、食べ物ものどを通らなくなり、死んでしまったこともあり、両歌の名声はますます高まることとなりました。

さて、あなたが判者なら、どのような理由で、どちらの歌を勝ちにしますか？　皆で話し合ってみると、面白いでしょう。

〈作者と出典〉

平兼盛は、十世紀頃の歌人。光孝天皇（→「15 君がため春の」）の玄孫にあたりますが、臣籍に降下しました。この歌の出典は、３番目の勅撰和歌集（天皇の命令で編集された和歌集）である『拾遺和歌集』（1006 頃成立）です。

---

1 ハ行の子音は、８世紀頃 [p] から [ɸ]（現代語の「フ」の子音）に変化し、やがて 11 世紀頃、前後を母音にはさまれた語中・語尾の [ɸ] が [w] と発音されるようになりました。なお、[ɸ] が [h]（現代語の「ハ・ヘ・ホ」の子音）に変化したのは、17 世紀頃と推定されています。